



読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。
(編集部より)

女性医師の窓

患者との架け橋

石川県立中央病院 初期研修医1年目 辻 沙織

楽しかった大学生活が終わり研修医として働きだして気付けば数ヶ月が過ぎました。毎日が数え切れない失敗や発見の連続でこれまでの人生で経験した事のない早さで進んでいきます。ようやく病院内を迷わずに歩けるようになり、“先生”と呼びかけられても振り向けるようになりました。

自分の担当患者さんの回診をしていると、患者さんのベッドサイドに病気についての本や時間つぶしのための小説や漫画など様々な本が置いてあるのをよく見かけます。元々読書が趣味な私はついつい気になってしまって本の話で盛り上がりすぎてしまい、患者さんのベッドサイドに長居してしまうこともしばしばあります。本の話をしているうちに、所々で患者さんが自身の疾患に対する思いや入院生活についての思いをお話して下さることがあり、患者さんのことを知るいい機会にもなります。また、日々の業務の中で勉強しなければならないことが次から次へと湧きあがってくるため、医学書を開く機会も以前と比べて格段に増えました。一つの事象に対し様々な種類の医学書に当たることも増え、言い回しや何を強調しているかによって同じ事象に対する認識でも違った印象を受けることがしばしばです。

私にとって本は窓のような存在です。身近な存在でありながら、実際に体験したことのない世界を知ることができます。また新たな知識や発見と自分を結びつけてくれます。そしてさらに周りの人とのコミュニケーションツールとしても機能してくれます。本から覗いた世界は晴れていることもあれば嵐のこともあります。想像できないほど無限に広がっている世界との接点、架け橋となってくれます。

日々過ごす中で、患者さんにとって研修医ってどういう存在なのかなと、ふと思うことがあります。もちろん患者さんはいちいち“この先生は研修医”と意識していることは少ないと思いますが、初診から終診となるまでずっと診る主治医のような関わり方ではなく一時期だけ担当し途中で去ってしまうことがほとんどです。また上級医の先生と比べてきっと診察や問診の手際もよくないでしょうし、同じことを何回も聞かれたり診られたりすることもあるはずですが、ただ、私自身は自分が患者さんにとって本のような存在になれたらいいなと思っています。

初めて担当患者さんを受け持った時、上級医の先生から“研修医の一番の仕事は患者さんの近くにより長くいること”と言われました。比較的時間的に余裕があり、上級医の先生ほどの専門知識をまだもっていない研修医だからこそ、主治医の先生には聞きにくいと感じるような些細なことでも気軽に尋ねることができたり、患者さんの立場にたって専門的な話をより噛み砕いてわかりやすく説明できる存在でいれるのではないかと思います。また、疾患のことだけではなくその人の社会背景や生活についての思いを話しやすい環境を作ること、疾患の治療のみならずその人にとって何が最善なのかを考えていけたらいいなと思っています。そのためにも日々患者さんと過ごせる時間を大切にすることを心がけつつ充実した研修生活を送っていきたくです。